

比較方法と地理的分布

—無アクセント方言をめぐって—

九州大学 高山 倫明

1 アクセント変化の方向性

現代日本語諸方言のアクセントを概観すると、比較的複雑な構造で型の区別の多い京阪式が列島のほぼ中央に位置し、相対的に単純な東京式がその両脇に、さらに単純な無アクセントが周辺部に分布する、いわゆる周圈的分布を示しています。それらは、概ね多型から順次型の区別を減じていったものと考えられ、無アクセントは最も新しく現れた形式であろうというのが今日の通説です。

一方、その周圈的分布を重くみて、逆に無アクセントを多型より古層に位置づける立場もあります。比較言語学的方法と中央語のアクセント史資料に依拠した通説に対する、言語地理学的観点からのアンチテーゼといった様相です。複数の研究者による主張がありますが、それらに共通するのは、無アクセントを先住民の言語（縄文語、前弥生語など、論者によって呼び方が違う）の特徴とみなす点です。これが正しければ、北関東・南東北太平洋側や、九州の西北部から東南部へかけて広く分布する無アクセント地帯の方言は、基層言語の特徴を今に伝えているということになります。古代的ロマンを誘う、スケールの大きな説といえるでしょう。



図1：『国語学大辞典』付録所載の図（平山輝男氏作図）を簡略化

2 周圈的分布の解釈

柳田国男は、カタツムリの呼称が、列島の周辺部から内側に向かってナメクジ系、ツブリ系、カタツムリ系、マイマイ系と順序よく並び、デダムシ系が中央（近畿）に分布するとしうえで、そ

れを中央において起こった、ナメクジから順次デダムシに至るまでの言語変化の投影と解釈しました。方言圏論です（『蝸牛考』1930）。政治的・文化的上位にある地域の言語の改新が周辺地域へ波状的に伝播するという発想はドイツのJ・シュミットの波状伝播説（1872）にすでに見られ、また、柳田の示したデータは複雑で必ずしもきれいな分布を見せてはいませんが、「古語は辺境に残る」という素朴な認識に理論的根拠を与えた格好になり、多くの支持を得て今日にいたっています。

もっとも、これはある典型をあざやかに示したものであって、「辺境」にある形式がつねに古いというわけではありません。「古語は辺境に残る」というときの「古語」とは、現代中央語からは消えた過去の語形のことを指しています。ですから、ヤマ、ウミ、ヒト、等々は古くからある語ですが、今でも使われているので「古語」ではありません。このような意味での「古語」はそもそも中央語には残らないし、逆に言えば、それを残しているところが辺境なのです。

また、中央語がひとつの体系であるのに対し、ここでの「辺境」は「古語」を残した方言の総体であって、一対一の比較で「辺境に残る」と言っているわけではない点にも注意する必要があります。どの方言も、共通母体の形式を何らかの形で引き継いでいますから、中央語という一方にも古い形式はたくさん存在します。そもそも、言語の獲得は、周囲を飛び交う具体的・一回的な音声をもとに、個々の幼児の脳内で個別に行われるものですから、いかなる言語も世代交代にともなう変化を免れることはありません、そのかぎりにおいて言語変化は地域を問わず進行します。そこへさらに、中央からの伝播がかぶさるのです。その際、それは語彙レベルにおいて顕著であることにも留意する必要があります。たとえば英語起源のインターネット関連用語が音訳・翻訳を通じて世界中に広がるなど、語彙レベルでは言語間の伝播さえも通常に見られます。音韻・文法などが外部から受ける影響とはおのずと相違があるのです。

さて、周囲的解釈が効力を発揮するのは、遠隔地に分布する同一あるいは類似の形式が、偶然の結果である確率が低い場合であり、その合理的解釈として、過去の連続性を推測し、それを分断するかたちで中間に分布する形式を、相対的に新しいと認めるものです。言うまでもなく、ここには、言語形式とそれが指し示す対象との間には必然的な関係はないという大前提があります。言語記号の恣意性と呼ばれるものです。

北関東・南東北や九州の一部、八丈島、大井川上流、福井、四国西部などに分布する無アクセントを古層と位置づける説が積極的に支持されるためには、離れて分布する無アクセントどうしに、偶然ならざる対応関係を指摘する必要があります。

3 日本語アクセントの諸相

アクセントには、規則によって決まる部分と、一々の語について記憶されている部分とがあります。たとえば、東京方言における次のような例は、一定の規則によって導かれるもので、どの型におさまるかは予測が可能です（高い部分を傍線で示す。以下同じ）。

- (1) ケネディ大統領 / ケネディ空港
- (2) ゲブレシラシェ / ゲブレシラシェ

(1) で同一人物名に違いがでてくるのは語構成によって異なる複合アクセント規則が適用されたからで、たとえば「オズワルド大統領」「オズワルド空港」のように初めて見るような組み合わせでも、決まった型におさまります。(2) は比較的耳慣れない外国語や、「アカサタナ」、「キヒミケヘメコソトノモヨロ」といった無意味音連続にしばしば適用される規則によるもので、どちらも語末

から数えて－3拍目から－2拍目にかけて下がり目のある型におさまっています。有名なマラソン選手の名前を例に挙げましたが、原語の音訳の仕方の違いで、日本では上記のような二通りの表記を目にします。これを声に出す場合、語末が「シエ」のように2拍になるか、「シエ」のように1拍になるかで、下がり目の位置がずれるわけです。

一方、端・橋・箸におけるハシガ・ハシガ・ハシガのような区別は東京方言の習慣にそって一々記憶しているものであり、語形や意味などから予測できるものではありません。地方出身者がアナウンサーなどを目指すときにアクセントで苦労するのは、単語とアクセントのアドホックな結びつきを、膨大な語彙について記憶しなければならないからなのです。

コンピュータ上の文字情報を音声に変換して読み上げるソフトがあります。最近のものは性能が向上して東京方言のアクセントで読み上げてくれますが、それは、文字列を意味単位に解析し具体的な音声に結びつけて出力するプログラム（規則の束）の部分と、個別の諸情報の入った単語データベースとから成っています。予測可能なアクセントはプログラムによって処理すればよく、いちいちの語について情報をデータベースに入れておく必要はありませんが、上記の三つの「ハシ」が正しく出力されるためには、データベースの方で個別に情報を入力しておく必要があります。実際の東京方言アクセント話者も、頭の中に東京方言アクセントを導き出すためのプログラム（音調規則）と、個別情報の入った単語データベース（心内辞書、レキシコン）を持っていて、両者を活用しながら喋っているのでしょう。諸方言のアクセントの相違は、音調規則の相違による部分と、心内辞書の単語情報の相違による部分とがあり、両者は分けて考える必要があります。

ところで、一個人が記憶する膨大な語彙量を考えると、心内辞書には必要最小限の情報が効率よく入っているものと想像されます。

東京式アクセントの場合、一々の拍について高い低いを記憶する必要はありません。その単語に下がり目はあるか、あるならそれはどこか、という情報があれば十分です。つまり語頭または語尾から数えて何拍目かを示す数の情報さえあれば、あとは規則の側でしかるべきアクセントとして出力することができるのです。数の情報の入っていない（入れる必要のない）語もあって、それは下がり目のないものになります。端・橋・箸は順に $\phi \cdot 1 \cdot 2$ となります。 ϕ は情報なしです。数字は語末から数えたものにしていましたが、頭から数えたものにしても、規則の方でそう決めておけば同じ結果が得られます。拍数がふえれば何拍目かの候補もふえるので、そのぶんだけ型の区別がふえることとなります。東京方言のn拍の名詞にはn+1のアクセント型があります。なお、単語には上がり目もあるように見えますが、それは一定の意味内容をもった音連続（音韻句）の開始位置を示すマーカーとして機能しているもので、単語に固有の情報としてデータベースに入れておく必要はありません。

つぎに、九州西南部に分布する二型式（長崎・鹿児島など）は、単語の長さに関係なく、すべての語が二つの型のうちのどちらかに所属するというアクセント体系です。たとえば鹿児島方言では、その語によって統制される音韻句全体の音調が、後ろから2番目の拍のみが高い語群（A型）と、最終拍のみが高い語群（B型）に分かれます。なお、この方言の韻律単位（アクセント付与のための数える単位。拍）は、モーラではなくシラブルです。

A型：カゼ、カゼガ、カゼマデ、カゼマデモ

B型：ソラ、ソラガ、ソラマデ、ソラマデモ

数えて何拍目ではなく「どちらか」に意味があり、このようなタイプは語声調と呼ばれています。一方の語群の単語にのみ、それと示す情報があれば、もう一方は自動的に決まるものです。

京阪式は、東京式と二型式の両方の特徴を合わせ持つタイプとってよいでしょう。すべての単語が高く始まる語（高起式）と低く始まる語（低起式）に二分され、その各々についてさらに下がり目の有無と位置による型の弁別が行われています。

イノチガ、アルイノチガ（命＝高起・語末から3）

イチゴガ、コノイチゴガ（苺＝低起・語末から2）

高起・低起の別は「どちらか」に意味がある語声調で鹿児島方言などと共通し、下がり目の有無と位置の指定は東京式などと共通します。区別の指標が多いぶん、型の区別も多くなります。

以上は、情報の多寡はあっても、いずれも語ごとのアクセント情報によって型が区別されるものです。この、語ごとの情報がまったくないのが無アクセントです。もともたないのか、あったものが失われたのか、そこが冒頭に紹介した両説の対立点ですが、少なくとも、現状において情報のないものどうしから、偶然ならざる「対応関係」を見いだすことはできません。したがって、この場合は周圖的解釈が有効であるとは言いがたいのです。

4 九州方言アクセントの古層

語とアクセントの関係は恣意的なものであり、だからこそ諸方言の多様性がありえたわけですが、それにもかかわらず、たとえば東京方言で同じアクセントをもつ庭・鳥・枝などが、具体的な音調をそれぞれ異にしながらも、他方言でやはり同じ語群に属しているという、面白い事実があります。石・川・寺などにも、松・笠・肩などにも、同様の偶然ならざる対応が指摘されています。なぜこのようなことがあるのでしょうか。これを合理的に解釈するには、諸方言アクセントは共通の祖系に遡り、そこでたまたま同じ情報を共有していた語群が、運命共同体のように各地で各様に変化をとみにしたと考えるしかありません。いったん合流した語群は同じ情報でそろってしまうので、これを元通りに選り分けることはできません。ここから、体系どうしの相対的な新古関係を考えることができます。

2拍名詞のアクセント対応

	東京	京都	豊前	筑前	鹿児島
庭・鳥・枝・竹・酒 …	○●▲	●●▲	○●▲		○●△
石・川・寺・歌・胸 …	○●△	●○△	○●△	○●△	
山・犬・草・池・腕 …			○●△		
松・笠・肩・種・船 …	●○△	○●▲	●○△	●○△	○●▲
猿・婿・鮒・雨・声 …		○●△			

さて、九州東北部に分布する豊前式アクセントは、構造的には東京式と変わりませんが（つまりプログラムは同じ）、語群の合流のしかたに違いがあって、単語レベルで見えていくと東京方言と異なるものが出てきます。東京式、豊前式、どちらを原型にすえても、一方から他方への自然な変化は導けません。豊前式は、南北朝期に京都で起こったと考えられる体系的アクセント変化より前の古い京阪式から、東京式は、その変化の後、つまり現在の京都方言のような体系から、それぞれ出発すると合理的に変化が説明できます。その後、ともに京阪式の持つ語声調を失い、下がり目の位置の情報のみとなったと考えることができます。豊前式は東京式より一段古い区別の痕跡を引きずっていると見るわけです。

隣接する筑前式も、構造的には豊前式などと大差はありませんが、下がり目のない型（φ）と最終拍の後に下がり目のくる型（1）の区別がなくなり、「日が／火が」「端が／橋が」が同じになっています。豊前式から筑前式への変化は想定が可能ですが、その逆は不可能です。

西南部二型式における二つの語類は、これも南北朝期のアクセント変化より前の、古い京阪式アクセントの高起式・低起式に対応していることが知られています。こちらの方は、位置の情報を失い、語声調だけを残して、それを独自に変化させながら今日に至っていると考えられます。

鹿児島に隣接する都城には、尾高一型アクセントと呼ばれるものがあります。鹿児島のB型のように音韻句の最終音節だけが高くなるのですが、心内辞書に判で押したような情報を入れておく必要はありませんね。東京方言の句頭の上昇と同様、音韻句に関する規則で導けるものです。語に固有の情報がない点では隣接して広がる宮崎・熊本などの無アクセントと変わりはありません。

さて、西北部から東南部にかけて、九州を袈裟懸けに分布する無アクセントですが、これは東北側の筑前式・豊前式と西南側の二型式をきれいに分断しています。しかも分断された両者の、語に固有のアクセント情報には偶然ならざる対応があります。こういう場合は、ほかならぬ言語地理学のセオリーに従って、中央部に分布する無アクセントを相対的に新しいとみなすべきでしょう。

無アクセントを先住民言語の特徴とみなす説は魅力的ではありますが、それが拠って立つ言語地理学の方法論に照らしても成り立ちにくいと言わざるを得ません。

文献

小泉 保（1998）『縄文語の発見』（青土社）

杉崎好洋（2008）「人類学、考古学は日本語アクセント分布とどう関わるか（三） — イデオロギーとしての〈自立変化説〉 — 」『山口幸洋博士古希記念論文集 方言研究の前衛』（桂書房）

高山倫明（2000）「日本語音韻史の方法」「日本語学」第19巻11号

高山倫明（2010）「無アクセントの史的位置づけ」「文学研究」第107輯

山口幸洋（1998）『日本語方言一型アクセントの研究』（ひつじ書房）

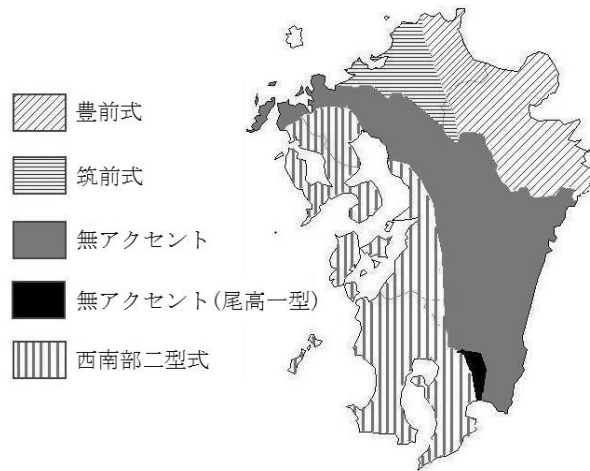


図2：九州方言アクセントの分布